

「図書館の遺伝子をもった新しい施設種」を語ろう

森田 秀之（株式会社マナビノタネ代表取締役）

※事前課題として学生は、森田秀之氏の論考「図書館の遺伝子をもった新しい施設種」（『図書館雑誌』2016年4月号、p.229-231）を読み、共感した部分に青ライン、違和感を覚えた部分に赤ラインを引き、その画像を森田氏に提出した。

事前課題の論考が掲載された『図書館雑誌』は図書館の専門誌ですね。これについて確かに図書館界でいろいろなことを思った方がいて、図書館界の方々が年1回、一堂に集まる全国図書館大会の2016年の大会の記念講演でお話しさせていただいたんです。青山学院大学のホールで800人ぐらいになったんですけども、その講演会の終わりに流した映像をまず流します。私の住んでいる地元で詩人の長田弘さんをお呼びしてご講演していただいた時のものです。



長田 弘氏 2011年秋の講演会より（1分）

本に書かれているものがなにかじゃなくて、その本が自分の中に思い出させるものがある。それが自分にとって一番大事なものだということに気づくのは残念ながら歳を取ってからはじめて気づくようになりました。最初に読んだ時に、今日これを引用して、今最後に読んだものも覚えていたわけでありません。しかし、それを不思議なことに忘れていたはずなのに、読み返すと蘇ってくるんですね。ああこの言葉に自分は何かを、サムシングを受け取っていたんだと。そのサムシング、つまり名付けようもない大事なものがそこにある場所というのが、本というものとして残っているものなんだなあというふうに考えるんですね。これがないといけないうんたろうというふうに思います。

これは論考の中にも書かれていたと思うんですけども、この「名付けようもない大事なもの」って言葉。これがですね、非常に自分の中で刺さりました。その全国大会の最後のスライドです。「なぜ、わたしたちは本や資料を継ぐのか。名付けようもない大事なものを、現代から次代へつらなる すべての愛すべきひとへ渡していくために」こういった仕事をするんじゃないでしょうか。こう締めくくったんですね。それに対してお聴き頂いた皆さんから共感したといったたくさんの感想をいただきました。なかには、はじめて講演を聞いて泣き

ましたという感想もありました。そしてこの論考に書いた考え方に基づいて新しい図書館を作り、それが4年前にオープンしました。この話はあとでします。

みなさんは2003年あたりの生まれですか。皆さんが生まれたぐらいの時に私が何をしていたかといいますと、2005年に愛・地球博という万博があって、この論考にも書きましたが、ここでサイバー日本館のディレクターをやりました。この万博では地球環境問題が取り上げられたんですけども、準備の際にまず専門家たちに話を聞いたら、地球はもう壊れている、地獄の門をくぐってもう後戻りができないんですよというようなことをどの方も言われたんです。本当に大変なことが起こるんだということを聞かされて、地球規模でいろんなことが起こりますよってということで、私は、異常気象、エネルギー問題、食糧難を何とかしなきゃいけないという思いが大きくなって、万博が終わると会社を辞めて、いまは長野県のこういう場所に住んでいます。



もっぱら考えていることは米を作ること。なぜかっていうと食糧難になった時に一人一人がお米を作ること、食べものを得ることがどのぐらい大変なんだろうかっていうことを試しています。それからエネルギー。日本はエネルギーがないって言うんですけども、木質バイオマスエネルギーはあるんですよ。薪ストーブであったかい冬を過ごすためには自分たちで薪をつくるのはどのぐらい大変なんだろう。そんなことを試したくて、会社までやめて移住をしました。それが15年前。このように木を伐ったり、重機を操作したり、鉄腕ダッシュという番組がありますけれども、そんなことをやっています。

それから田んぼも借りて地主さんにひとりで習い始めたんですけども、これまでに300人ぐらいの人が田んぼに来て、自分たちでお米を作ることを行っています。

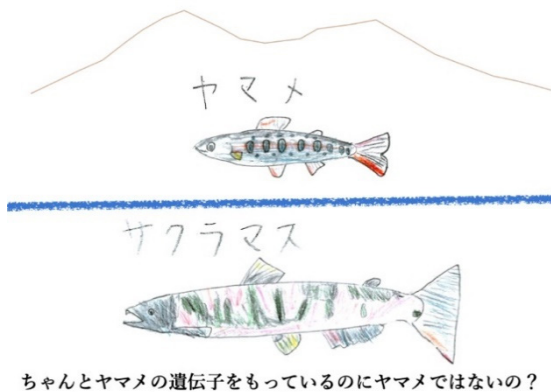
こんな田んぼをやるわけですけども、普通はなにか始めようとする時に本や教科書を読んでもみますよね。それをしないんです。はじめに教室の広さぐらいの田んぼをやればあなた1人が食べていけるんですよって話をします。それでやってみて、気づくことがあって、わからないこともあって初めて本とか資料を見るんですね。普通は逆ですよ。本を読んだり、いろいろなことを教えてもらってからやりますよね。私の考え方は、まずやってみて、



真似てみたりして、これがわからないとか、ここに気づいたってものを本で確認して、またやってみるといふ、学ぶサイクルの始まりが逆なんですね。その方が気づくことが多いんです。自分たちでやってみて気づいたことにどんどん興味が湧いてくる。

たとえば、水はどこからくるんだろうと思うわけです。水は川から水路で引いてきます。田植え前に地域の人みんなと一緒に清掃します。私は自治ということ初めてその場で体感したわけです。

多分、多くの皆さんは東京やその近郊、都市で育ってきていると思いますけれど、以前は自分たちで生きていくための環境を整えていくことをやってきていたはずなのが、いまでは行政に任せることになっちゃってますよね。でも、ここではみんなやってる。そして、自分たちではできないことを自治体をお願いする。この順番が今は違ってしまっているわけです。自治体に任せるのではなく、自分たちで治めていく。そういうことを日頃から感じているなかでこの論考を書きました。



ちゃんとヤマメの遺伝子をもっているのにヤマメではないの？

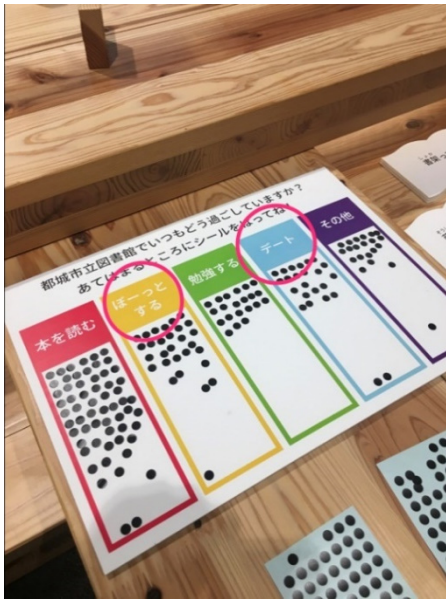
それからヤマメの話について。私は川の漁師もしています。川魚の漁業組合員でもあるので、投網を打って魚を獲ることもできる権利をもっているんですけども、川ではヤマメも獲れます。そのヤマメの中には強いヤマメと弱いヤマメがいます。弱いヤマメは追われて海に逃げていく。海に逃げていくと、弱かったはずのヤマメが大海で生きていくということによって知らないうちに大きなサクラマスになってしまう。そしてまた川に帰ってくる。

事前課題で結構ここに赤線を引いていただいて、赤線が引かれることを楽しみにしたものですからありがたいんですけど、やや勘違いをしている方も多いのかもしれません。今までの図書館を否定しているわけでは全くないんです。ちゃんと図書館の遺伝子を持っているのに「図書館」と呼ばない場所ができてくるということがある。これに対してしっかりと考えておいた方がいいんじゃないかという問いかけです。サクラマスは遺伝子的にはヤマメなんですよ。だから、この魚はヤマメじゃもうなくなっちゃったってということではないんですよ。けれども結構姿が違っていたりというようなことが、図書館でも公共施設でも起こってきているということをお伝えしたかった。

皆さんがどこに線を引いたかまとめてみたんです。結構な人数だったのですが、まず最初のところですね。図書館でどんなサービスをするか。図書館で体育とかリクリエーションとかそういう集会の開催はちょっと違和感があるっていう人が2人ぐらいいたんですよ。まあ、図書館ってやっぱり跳んだり跳ねたりする場所じゃないから違和感があるのかな。

ここでちょっと10の問いかけをしようと思います。皆さん、なんか喋りたくなったら手をあげて喋ってくださいね。

1番目は、《公共図書館でいいですよって言えないような使い方》。何かありますか。もちろん普通にやっちゃいけないこと、公序良俗に反することはやっちゃいけないんですけれどもそれ以外で。たとえばファッションショーはやってはいけませんか。



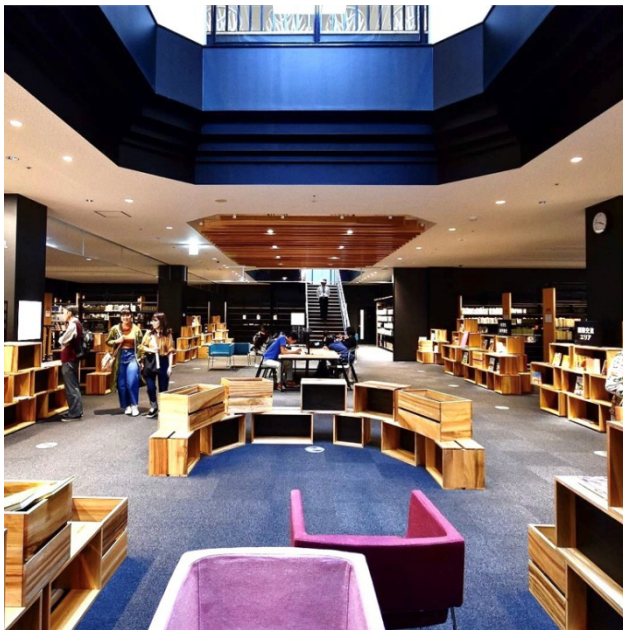
実はここは私たちが運営している宮崎県の都城市立図書館です。図書館でファッションショー、よくないですか。何でやっているのかというと、建設や土木の会社で女性が作業をする時に着る可愛い作業服がないのが悩みという話があって。だったらデザイナーと一緒に考えて試しにつくったものを、多くのひとが来館するようになっていた図書館でお披露目をしてその課題を広く知ってもらいましょうとなりました。

それからこういうアンケートをとったことがあります。「図書館でどう過ごしていますか?」。ぼーっとする、結構いるんですよ。デート、めちゃめちゃいるんですよ。居眠りしているおばあさんもいます。すごく気持ちよさそうにこっくりこっくりしている。そういうのを見て、ここは安心して居ていただける場所なんだなあとと思うんです。

かつて街中には大きなデパートがあってその裏側がショッピングモールだったんです。その建物を図書館にしたんですね。使われていない状態だったものを改修して図書館に変えました。4年前にオープンしました。



このような昭和のショッピングモールをパリの街角のパサージュのように歩ける図書館にしたんです。するとみなさんがわんさか来ました。1日に5,000人ぐらい来るんですよ。年間100万人ぐらい。まもなく通算400万人になるんですけども。



「つみ木ばこ」という木箱を使って自由自在にスタッフたちが棚を作っています。私と建築家、家具メーカーたちの4者で共同開発しました。ここの運営コンセプトは「ひとりひとりが《だいじなもの》をみつめていくために」です。さっき長田弘さんの講演の映像をみていただきましたが、長田さんが言っていた「名付けようのない大事なもの」から考えました。論考の内容に戻りますと、本当にサービスしたい利用者は誰かっていう章がありますね。私は利用者自らで図書館を活用していくのが理想だという考えで、それをコンセプトに込めてあります。そして本当に大事なものは人それぞれ価値観が違う

から、自らで考え、自分と違う価値観も尊重しようっていうメッセージでもあります。

2番目、《個人や地域共同体のニーズをどう知るか》。価値観が違うひとりひとりが使う本をどうやって収集するのか。個人は何を欲しているのか、その地域の人びとは何が課題なのか、夢なのか分からないとどんな本を集めればいいのか分からないってことになりますよね。資料は大事と図書館の人は必ず言うんですね。それは紛れもなくその通りです。でも収集した資料を提供しなければ意味がない。そこにあるだけで意味があるとか、シンボルだとかっていうのもあるかもしれないけれど、それを人に読んでいただくところまでいかないといけないですね。それには人びとのニーズを察知すること。これが難しいんですよ。リクエストを聞くのとはちょっと違うんです。リクエストっていうのは、本に対してのもので、人気とか、占いの本とか。それは図書館が対応すべきニーズでしょうか。図書館員のみなさんにはどうやってニーズを察知するかを考えましょうとよく言っています。でもこれって図書館に限ったことじゃないですよ。あらゆることに対して人のニーズを察知するっていうのはとても難しいけどもやりがいがある。しかもその本人すら気がついてないような、探し求めているものの先、要望の先のものさえも見つかるような場所にどうしたらできるか。そのためにはいろいろあの手この手を打つんですよ。

図書館の中でわざと空けている空間があります。ファッションショーもやった「ホール」です。ここではいろいろなテーマでトークイベントなどもします。館内には「静かな部屋」とか、「おだやかな席」といった一定の静けさがある場所を作っているの、こういうイベントをホールでできるんです。市内のお祭りの山車をホールで組んで展示、解説していくこともしています。本ではないけれど文化的な「資料」です。展示しながらアンケートも取って、新たなニーズを察知しようとしています。



とてもたくさん線を引いてもらっているのが、図書館が公民館と似てきているということに対して、共感するという人もいればそうじゃない人もいますね。違和感を持つところとして、特にこの「ユーザー様」という言葉にすごく皆さん敏感に反応していましたね。これちょっと嫌味も込めて書いています。調べてみると、たいていの公共図書館は市民の二割ぐ



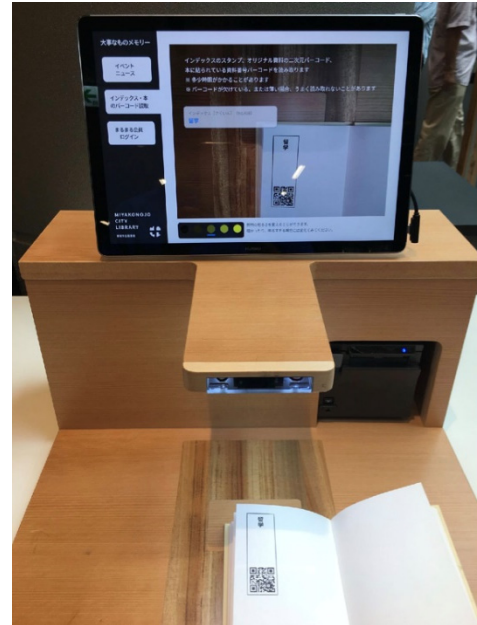
らいの人しか使ってないんですね。その限られた人が「ユーザー様」。もっともっと使ってほしいじゃないですか。使うべきだし、もっともっといろいろなことができるはずなのにもったいない。市民の中には文学なんて俺関係ないみたいな人がいっぱいいるんですよ。図書館は文学だけじゃないわけですから、そういう人たちにどうやって来てもらうのかっていうことを、あの手この手で考えてやっています。

地図はみんな大好きなんですよ。いろいろな情報を出したり、あと昔の写真を飾ってみたり。あの手この手ですね。映像、皆さん好きですよ。映像が見られる



ところを作っています。自分で検索して映像が見られる。言葉もキーワードがわからない、思いつかない人のためにさまざまなワードをあらかじめ並べておくんですね。

楽しいワードを含めて。そしてそのワードにQRコードが付いているんですけど、どんな本があるのか、ビデオが見られるのか、どんな場所があるのかGoogleマップに跳んだり、情報提供がいろいろできる。しかもこれスタンプになっていて、自分のノートにQRコードを残しておくことができます。それをスマホでももちろん読み込めるんですけど、スマホを持ってないような人も館内にあるタブレット端末にかざすとワードに関するさまざまな情報が表示できる。あらゆる人に自分で使ってもらう環境を作っています。



それから購入する本を選ぶっていうのは図書館員にとってすごく大事な大事な仕事なんですけれども、「要求論か価値論か」という話はもう授業でやりましたか。

市民がリクエスト、つまり要求する本を買うということと、司書さんがこの本は価値があるので読むべきだということでおすすめること、どっちが大事でしょうか。図書館界ではそ



ういう議論をしてきていますが、私はどっちも大事だという考え方です。利用者がほしいと言った本に司書さんたちも気がつかなかったということもあるだろうし、逆に司書さんがこの本がいいですよって利用者がそんな本があったんですかっていうこともあるし、どっちも大事。それを試すというか察知するのが「ショーケース」っていう場所なんです。

あるテーマを決めて、たとえば「自然食品」というテーマで取次店に見計らい本を100冊選んで送ってもらって並べるんですね。利用者はこの中に入ることができます。図書館にあったらいいと思う本にしおりを挟んでもらう。そうすると利用者の「こんな本を欲しいな」というのが図書館員は分かるし、利用者はこんな本があるんだっていうこともここでわかる。ここでさっきの要求論、価値論の両方が満たされるわけです。だからといってしおりが入ったものをすべて買うわけでもないんです。さらに吟味して買うんですけども、7割ぐらい買ってます。つまり100冊のなかから70冊買っているわけです。1つのテーマの資料を70冊持っている図書館はなかなかないわけです。このようにしてその地域の人が欲している本のテーマは何かというニーズを察知して、利用者と一緒に特徴ある地域図書館にしていく

わけです。

地域のコミュニティの解体が進んでいるというところに対して多くの人に共感してもらいました。実はいまコミュニティって呼ばれているものにはふたつの種類があるんです。1つはある場所に住んでいる人たち。居住地区単位のコミュニティ。それを束ねたものが市町村、自治体ですよね。それとは別に、共通の何か利害関係とか興味とかそういうものによってくくられている集団があるんです。例えば会社とか組合とかサークル、学校とか。これも最近一緒くたにしてコミュニティって呼んでしまっているんですけど本来これはコミュニティって呼ばないんですよ。これはアソシエーションです。で、このコミュニティとアソシエーションの縦横の糸を図書館ではしっかり編んでいくことができるはずだと私は思っている。難しい話ですね。地区ごとの公民館は縦。公民館に図書室ができて、図書室と一緒にして図書館になっていった歴史的な背景があるんですけど、図書館は2割ぐらいしか使っていないということを絵で表現すると人の姿はパラパラになる。しかも図書館に近い地区のひとは来るでしょうが、遠い地区の人はあんまり使っていないかもしれません。これで公共性は大丈夫ですかって思います。これをどうするか。移動図書館車を走り回らせたり、いろいろな方法があるんですけども、それを実践していかなければなりません。

横糸のアソシエーションに対応することによって地区間の格差を解消する方法もあるのではないかと考えています。自分たちには図書館は関係ないと思っている人は行かないですよ。例えば林業組合の人は図書館には何も関係ないしと書いていたら行かないけれど、林業に関係する本が図書館にはいっぱいあるって言ったらでは行ってみようかとなるわけです。関係性があるかということですね。関係が深くなるとみんな来る。みんな来るとどうなるかっていうと、実は各地区の来館者数のばらつきがなくなってくる。関係があると思えば、近いから遠いからって関係なくなってくる。地域の人とどのような関係性がある本を揃えるといいかなと考える。たとえば都城だと街なかにある図書館から遠い地区ほど農業や酪農が盛んですから、そういうテーマを揃えれば、距離に関係なく利用者も増えていきます。

3番目は、「読む」ことから「活動する」ことへつなぐ意味。せんだいメディアテークの憲章「端末（ターミナル）ではなく、節点（ノード）である」ということに対して違和感を感じるっていう人がいました。それから武蔵野プレイスの理念「アクションの連鎖が起こり得る機会と場を提供し、支援していく」に違和感を感じている方も結構いました。どうしてかなと思ったんですけど、誰か言える人いますか。いないかな。図書館は本の場所であってほしいみたいなことなのかな。つまり本の世界であって、そこでなんか動くとかそういうことじゃないでしょみたいな。精神の世界は別に否定してないんですよ。それはすごく大事ですから。でも、公共図書館もいろいろな形で世の中に貢献していくという時代になってきた。そのためには、さっきの田んぼの話と同じで「やってみよう」と「読んでみよう」の行き来がとても大事になって思うんです。もうちょっと言っちゃうと、図書館は「知の拠点」ってよく言われますけど、知は現場にあるんですよ。病院にあったり、畑にあたり、現場に知があって、図書館は知そのものがあるというより、それらの知のインデックスとして現場と結びつけることが役割のはずで、このつなぐことをもっといろいろできるんじゃないかって思っています。

武蔵野プレイスに行ったことありますか。ああ、いますね、ありがとう。武蔵野プレイスは3階に市民活動支援フロアっていうちょっと特別なフロアがあって。たしか300ぐらいの



市民活動団体が登録されています。ここに行くと団体ファイルがあってどんな活動をしているのかがわかるようになっていいる。そうするとその団体に入ってみようかなっていう人も出てくる。武蔵野プレイスでは理念に「アクションの連鎖」という表現を入れましたけれども、読むことから活動することへ導くことになるんですよ。都城市立図書館では「プロジェクトスタジオ」という部屋を作ったんですね。あちこちの図書館でも部屋の時間貸しサービスはよくやられてますよね。都城ではあるプロジェクトが終わる日まで片付けることなく使っていていいって部屋を作ったんです。そうすると活動をやっている過程もそのまま続けて見せることができるんです。今こういう感じでやっていますよって。当然、資料の山になりますよね。今は昔の街なかはどうなっていたか調査するプロジェクトをやります。何でやっているかという、昔の街ってどういうところだったんだろうということ振り返る。そしてその後、じゃあ未来の街なかはどうあるべきかってことをみんなで考える。そのためには本が必要になってくるんです。何かをやるための本がここにはあるということ。そしてプロジェクトの成果を展示します。まちの模型も作ります。模型も図書館員が作っています。そうするとどんどん情報が集まってくるんですよ。昔の写真や地図も持ち込まれる。もうみんな市民が動き出すんです。



そういうことが起こるということを知ったのは2001年に開館したせんだいメディアテークでした。ここは平成を代表する建築第1位になりました。もう22年目に入っているわけですけど、ここもかつて開館をお手伝いしました。

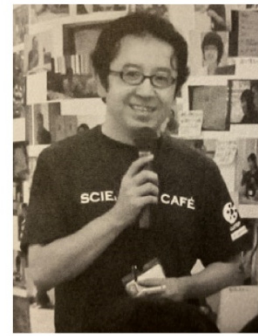
準備当時、生涯学習課長の奥山恵美子さんという方が、「メディアテークは、役所の仕事を無くすためにつくる」って私に言うんですよ。驚いて、どういうことですかと聞くと、「ここが機能すると市民の

人たちが情報を自分で見つけてそれを判断したり活動を始める。市役所では問い合わせに対して調べて答える仕事が多いが、それがなくなれば本当に助けなきゃいけない人を助けたり、未来のことについて考える時間ができるんですっていうんですよ。わあそうなんだってなってそこで私は図書館や生涯学習施設の役割、可能性を知ったんです。奥山さんは初代館長になり、市長になり、東日本大震災を迎え、二期務められてご引退されましたが、本当に市民活動とか、市民自らがどう学んでいってかということを中心に置いた市政を実践されました。そこで図書館を含む公共文化施設のすごさを目の当たりにしました。市民がみんなであるテーマで話し合おうとする場ができてくる。討論会、対話の場ができてくる。東日本大震災が起こっても、次々に市民が活動を始めて、すぐさまその情報を記録し発信する拠点

センターをメディアテーク内に作ってやっていくわけです。このような考え方のキートンになったのが、渡辺保史さんという方がオープン翌年から2年間行われたワークショップ「共有のデザインを考える」です。共有って言葉はますます大事になりますよね。それをテーマにしたワークショップでした。その時に生まれた「自分たち事」という言葉を保史さんはずっと大事にされていて1冊の本にまとめようとしていました。普通は「自分事」「他人事」と言いますが、他人ごとにもできないものが「自分たち事」です。私もこの言葉に何か大事なものを感じて意識的に使うようになりました。保史さんは、くも膜下出血で数年前に急逝してしまっただけです。私も保史さんとは仲良くさせてもらっていて、亡くなる1ヶ月前にもお会いして、もうすぐ『「自分たち事」のデザイン』という本が書き上がるんですと嬉しそうに話されていました。原稿はほぼ完成していたので、それを有志で本にしました。それがこの『「自分たち事」のデザイン』。残念ながら限定数だったのでもう購入はできません。この言葉は図書館にとっても大事な表現だと思っています。自分事っていうと、なんか一人の関係になってしまいますけど、自分にも関係することっていっぱい世の中にあるはずなんですよ。それをみんなで考えていくっていう場を作り、活動するってことが保史さんの考えでした。



渡辺保史さん



4番目の問いかけです。《財源か新たな運営方式を見つけていかないと》。論考の2ページ目の建て替えのための財源はないという話のところすごい勢いでみんな共感してくれましたね。みなさんそういう社会になってきているという問題意識が強く、すごく感動しました。確かにいま財源がないんですよ。これから社会がどうなっていくのか、分からない状態なんですよ。でも時代として考えてみたら、旧石器時代から人間はいるわけで、いろんなことを乗り越えてきているんですよ。やっぱりお金というリソースをどうするかって考えるのがどの時代でも必ず必要なんですよ。

川口市中央図書館に有料席を作った話を論考のなかに書きましたけれども、これに対して皆さん違和感がありますって来ましたね。有料席はだめですか。どうしてでしょう。図書館の無料の原則に反すると思ったからですかね。図書館の中に無料の席をたっぷり作った上に、有料席を作ったんですけれども。これ、年会費2,000円で2,000人が入ってくれたんです。つまり400万円の収入で無料か材料費だけでイベントをしてみなさんにサービスとして還元したんですよ。なんかやろうとするってリソースって必要なんです。リソースを変な形ではなく、みんなの志というかそういうもので集めておくことがどう考えても必要ということです。それを一緒に考えていかないと。税金もそうなんですよ。本来は取られるって考えるのじゃなくて。

ちょっと税金の話をしてしまおう。これは私の知り合いの公認会計士の先生の説です。昔々イノシシや鹿を獲る名人がいました。この人、すごい獲るんですよ。だけど冷蔵庫なんてない時代で干し肉にはできたと思いますけど、基本保存が効かない。そうすると自分たちで食

べる分をとって、残りのお肉は神様に捧げる。捧げられた肉はその集落の長老が神様からの捧げものだからと言って集落全員に等分してお肉を配る。誰かからもらったり、あげたりすると上下関係ができちゃうけれど神様からいただくことでそうはならない。あげる方も神様に捧げられたっていう満足感がある。これが税の始まりなんじゃないかというんです。そういうことがこれから大事なんじゃないかなって思っています。ちょっと自分の話をすると、私が移住した時にご近所の方から白菜要りますかって聞かれたんです。いいんですか、ありがとうございますっていうと、軽トラでわーっときて、ピラミッドのように白菜を積み上げたんですよ。すごいなと思って、ありがたかったし嬉しかったですね。だけど気づいたんです。自分も野菜が作れるようになって人にあげるじゃないですか。ものすごく気持ちいいですよ。だから損得って違うなと。ちょっとお金を払っていっぱいもらったら「得したな」となるけど、人にあげられることはもっと幸せ感があるんです。だけどあげて上下関係を作りたくない。上下関係ができない仕組みができれば一番幸せかも。そのような仕組みをいま考えているところです。で、財源をどうするかとか、新たなリソースを得るためにどうするかを考えていくことは公共として悪いことではないはずだと思っています。論考の「有料で席を……」という部分にすごい勢いで違和感の線が付いていたのでちょっと語ってみました。

財源はどれほど厳しいかということは地方に行くによくわかるんです。数年前に秋田県の藤里町で、「町」をリデザインするという仕事をお手伝いしました。藤里町の奥には白神山地という、日本で最初に屋久島と共に世界遺産に認定された場所が広がっています。今見えているところ、見渡す限り人の手が入っていない原生林です。ここにはガイドと一緒にないと入れません。こういうブナ林帯がずっと広がっています。川を覗くとイワナがたくさんいる。クマにも会いました。

その山麓の町なんですけども、人口がかつての1/3ぐらいになっちゃったんですよ。2040年には2,000人を切る。国からの地方交付金のみです。おまけに高齢化率、65歳以上の方が人口に対してどのくらいの割合でいるかというのですが、これが50%を超える。65歳以上の人が2人に1人、多くの方は80、90歳ですから、もうその地域だけでは自治が成り立っていかないとされています。そんな町の将来をどうしたらいいかっていうことで、2,000人で心豊かに暮らせる町を、今3,000人以上いるんですが、今のうちからデザインし直しておこうと。2,000人でも生きていけて、しかも高齢化率も止まるようなことを考える。ものすごい難題です。



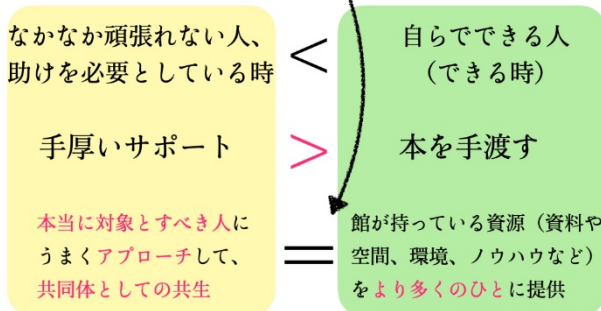
いま子どもはいるんですよ。でもこの子どもたち出てっちゃうんですよ。ここには高校、ましてや大学なんてない。都市に行ってしまう、そのまま就職すると帰ってくることがない。じゃあどうしたらいいのか。それは生業をつくっておくことです。図書館の話から町づくりという大きい話になってしまったかもしれないけれど、生業があればここで暮らせるわけです。今銀座に本社がある化粧品メーカーのハーブオイルの試験センターがここにできました。自然いっぱいでもめっちゃめっちゃ美味しい環境で研究できる場があることによって、地元の若者と東京から来た思いがある若者が一緒になってやっています。財源と地域をどうしていくかっていうことをセットで考えないと、これからの地域の自治ってうまくいかないんですよ。

さて5番目、《真の公平性（不公平な手厚いサポート）》。国民みんなから税金を取って支援が必要な特定の人を助けることがいいのかどうかということですが、ここについて違和感をもったという人が多かったですね。例えばさっきの藤里町って白神山地が有名なだけじゃなくて、若者のひきこもりをゼロにした町ということで、NHKの番組「クローズアップ現代」に取り上げられたすごく面白い町なんですけれども。「弱者」っていう言葉をちょっと考えましょう。そもそも何が弱いのか、どういう人が弱い人なのかも分からないですよ。藤里町でひきこもりをゼロにした社会福祉協議会会長の菊池まゆみさんという方は、そもそも勘違いしていると言います。相手が自分とは違う弱者って思っているところから違うと。例えば自分も足を怪我したり、大病をしたりするとすぐに弱い人になってしまうんですよ。また、ありがちなんですけども、人を助ける役にまわっている人が意外と大変な思いをしていたりするんですね。支援する側にいる人が意外と支援してあげた方がいいぐらい大変な状態だったりすることもある。普通をキープできていると思っている人たちの中にも大変な人もいますよ。私は弱者に入っていないなって安堵している人の中にも、やっぱり不安や不幸を抱えた状態になっている人もいます。いつ誰がどういう状態になっているかはわからない。なので、不幸とか弱者っていう言葉は使わないで「不便がある」という言葉に言い換えるのがいいんじゃないかと提案されています。足を怪我していて不便とか、目がちょっと見えなくなってきた不便とか、歳を取って不便とか、その不便を解消するような、そういうことをやるということが大事なんじゃないか。引きこもりも不便だと。それが解消できたら普通になるんですよ。そういうことを考えていく。地域で暮らす上での不便を支援するという考え方にすればもっと分かりやすくなるんですよ。

皆さんが生まれる前の2003年の話です。国土事務次官という官僚トップだった下河辺淳さんと、3人で対談することを鼎談っていいんですけど、鼎談する機会があったんですね。皆さん知らないかもしれませんが田中角栄というまあすごいワンマンだけれど実行力はある首相がいたんだけど、新幹線や高速道路を敷いたりする列島改造論を考えた角栄さんのもとで国土開発をしていったとんでもない人と。しかし、その時はもうお歳を召したからかもしれないですけど、いろいろ優しいことをおっしゃる。驚きました。論考のこの部分に対してもちっと違和感があるという赤線を引いた方がいましたね。「がんばって活躍している人には行政はがんばってくださいと言ってあげるだけでいい。」という部分。国とか行政が何かやってもがんばっている人にとっては邪魔になるだけだと。がんばっている人の方が何倍もうまくやろうとしているのに、行政が手を出さうまくいかなることが必ず起こるからもう邪魔をしない方がいいんだっていう意味だったんですよ。助成金が切れたらそ

のプロジェクトが終わっちゃうってことがよくある。自走していく仕組みを最初から作っていく方がうまくいったりするんですよね。要らんことを行政がするよりも。それよりかは、「国民みんなから税金をとり、自立できずにいる人の支援こそ行政が行うべきことなんです」って下河辺さんが言ったんですよ。びっくりした。もうなんか国土開発をやってきた人の言葉じゃないっていうか。「国民みんなから税金をとり」という部分も、誤解されている方がいるかもしれませんね。税金も払えないぐらい大変な思いをしている人からはとらないんです。特定の人を助けるっていうのが行政の公共事業なんです。2007年のデータで古いんですけど、「自力で生活できない人を政府が助けてあげる必要はないか」というアンケートを各国でやったことがあるんですよ。（「助けてあげる必要はない」に賛成する市民の割合のグラフをみて）イギリス、フランス、ドイツ、中国、インドは7~9%。アメリカだけ28%とすごく高い。アメリカは自立して自分の責任でやれって国ですからね。日本はどのくらいだと思いますか。38%です。助けてあげる必要がないと思っている割合が多いんです。今は違うかもしれません。ずいぶん変わったかもしれません。だけど、この高さは驚きですよ。やはり助けてあげることをやるべきじゃないかって思うわけです。

公共図書館の公平性は支援量を等しくして **幸せを平等化**



そこで公共図書館の公平性って何だろうって考えるんですよ。本を手渡す。「手渡す」っていうのは自分で選んで借りていくということも含めてです。館が持っている資源、資料に限らず場所とかノウハウとかをより多くの人に提供する。自らでできる人には環境をしっかりと作ってだけでいい。なかなか頑張れない不便を持っている人たちの数に対して、自分のできる人の方が多いですよ。本当に対象とす

べき不便を持っている人にうまくアプローチをして、共同体として一緒に生きていくというようなことを実現するためには、「この黄色（なかなか頑張れない人への手厚いサポート）と緑（自らでできる人のための環境の提供）」の量を同じにすることが図書館の公平性なんじゃないかと思っています。それが幸せの平等なんじゃないかなっていう考えです。

これで解決ではなくて、実はまだ課題があって、対象とすべき人をどうやって決めるのか、誰がそれ決めるのか分からないですよ。こういうことを指摘している人がいました。これわからないですよ、誰にもあなた弱いでしょって言えない。それは自分で決めること。辛い状況になった時、ちょっと助けてっていう時のために、サポートを受けられるような環境を整備しておくことが大事だと思います。自分のための場づくりが、実は自立支援にも繋がっていくんですよ。

6番目の《評価指標》と7番目の《自分でやってもらうための場づくり（自己支援）》。自立支援って難しいんです。支援したら自立できないというか、支援したところで、そもそもその支援がなくなったら倒れますみたいな。でもちょっとでもいいから自分でやってもらうことで、自立していく近道になるんですよ。

都城市立図書館では児童担当とか障がい者担当という呼び名をやめ、場づくりチームという名前に変えました。児童でも子どもでも自分で本を選ぶ。障がい者も、不自由な方でも自分で選ぶことができる方がよっぽど自由平等ですよ。人に用意されたものしか読めない世

界よりも。これは場づくりチームが書いた自分たちの紹介文です。「このチームが目指すのは、図書館を『みんなの居場所』にすること。児童やティーンズ、高齢者、障がい者など立場の違う方々にも利用しやすい図書館を作るために、できることはなんだろう？と日々考えて仕事をしています。」これを自分たちで考えたってのはすごいなと思ったんですよ。日々考えて仕事をしていますって感動しましたね。ひとりひとりが自分でできるために場を作っているんです。



「こどものにわ」という場があります。本を読みなさいっていう場じゃないんですよ。自由にしているいいよっていいですよ。どうしても静かにできないお子さんが多いんですよ。そのお子さんにも図書館に行って本を選ぶ権利と自由があります。なのでちょっと騒いでというか静かにしなくても大丈夫な部屋を作って、気持ちが静まった時に本を選びに書架に行ってもらおう。そういう部屋を作っています。そ



ういうお子さんをお持ちの親御さんで、子どもを連れて行けないから図書館に行けないっていう人が多いんですよ。そういう方にも、お子さんにここでちょっと遊んでいてもらって、まあ長時間目を離されていると困るんですけども、ちょっと本を取ってくるから待ってねって。ここは一般書も隣り合っていて、書店と同じような並べ方で、料理本だとか、健康本とかが別置してあります。こどものへやには「つみコップ」という紙コップがあってそれを積んでいく遊びができます。これで紙というものを知るんですよ。他にもいろいろなことができるんですよ。読み聞かせもやったり海外からの研修生などに楽器を弾いてもらったりして。あと、こどものにわではサインペンのインクで水に色を付けた色水をつくってどんな色ができるかなっていうのをやっています。絵本って、もちろんストー

リーに価値があるんですけど、絵があるっていうことにすごく価値がある。絵を楽しまなくてどうするんだと。そこで、色に敏感になってもらって絵もよく見てほしい。それからスタンプの体験。印刷は紙にインクを載せていくことですよ。その原理はスタンプが一番分かりやすいんですよ。スタンプにインクを付けて押していくことで、印刷ってということがわかる。図書館のホールでこういうことをやってしまうんですよ。どういうふうにすると崩れにくいとか、館内の風、空気の動きも気になる。

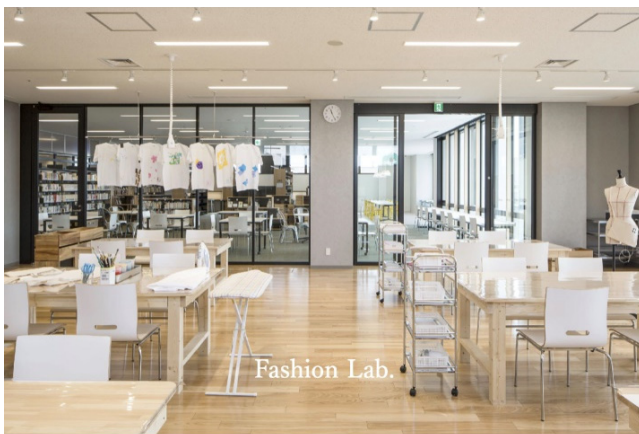
8番目、《個人データの扱い》。これは難しい話です。例えば、警察から防犯カメラの映像を提供してほしいといわれることがあるんですけど、簡単には出しません。やり取りをして、よくよく話をして出す必要があるときには自治体経由で出しますが、基本は出しません。みんな警察に協力するっていうのが当たり前って思っていないんです。そうじゃないんで

す。本当にそれが正しい行為なのかどうかっていうのをよくよく考えてやらないと、個人の信条とかいろいろなものの自由を侵害する可能性があるんです。だから私たち図書館に関わるひとは、個人情報保護法や差別用語をものすごく学ぶ必要があるってことを言いたいです。その上で、人が困っている時に、プライバシーを考えた上でお聞かせいただけますかって質問するタイミングがあるかもしれないし、ほかの人に漏らさないということは当然守ると思うんですけども、とにかくプライバシーは守るということを信頼してもらう。警察には何でも話していいというふうに思っていると無意識にプライバシーを侵害してしまう恐れがある。あと、「図書館では個人の貸出履歴の保存とか活用をやってはいけない」と鵜呑みにしていないで、なんでやってはいけないのか、どういうことだったら履歴データの保存をしないのか、知っておかなくてはいけない。さっきQRコードで本の情報が出てくる仕組みがあったと思いますけれども、借りた本をここで自分で記録することができるようになっています。会員サービスっていうのがあって、ここでログインをする。そうすると自分が借りた本の記録を見ることができる。感想を書いて保存しておくこともできます。今は図書館ではその本が役立ったかどうか追いかけることができません。でもその本はどれだけ役立ったか、図書館では捉えていくことが必要なんじゃないかっていう問いかけです。こうしなさいという意味ではなくて。都城市立図書館では読んだ本を記録するとポイントが貯まります。ポイント貯めてどうなるの。何も起こりません。だけどポイント貯めるってみんなすっごい好きなんです。何冊借りたとか感想を入れたとかそういうことの見える化です。ポイントが貯まるっていうことによって本を読む楽しみに気づく可能性がある。そういう楽しみ方から入ってくる可能性がある。このポイントを貯めるという仕組みは愛・地球博でやったんですよ。サイバー日本館のホームページを見るとポイントが貯まってピンバッジのプレゼントが当たるかもしれない応募権を付けてあげたんです。はじめはポイントを貯めたくてページをどんどん開くんです。

でも最後の方は子どもたちはプレゼントはいつでもよくなって、みんな環境問題にすごく興味を持つようになってコンテンツを見るようになっていくんですよ。お父さんが車を買う時にエコカーにしないのと言いましたといったアクションレポートが毎日送られてくる。もう子どもたちは変わっちゃうんですね。うわすごいなこれと。そういうようなことが起こる可能性を秘めているこの仕組みに対して個人の行動履歴を記録してはいけないと安易に捨ててはいけないんじゃないかなと思っています。

9番目、《余裕がない行政と「コンビニ型図書館」》。行政が図書館をやるって時に、コンビニ型の図書館が一番効率よくやれるんですよ。コンビニ型図書館がいいと線をつけた方、たくさんいましたね。私も悪いとは言っていないですよ。いつでも開館していてマニュアルどおりに均質にサービスするといったコンビニ型図書館は、いい点もあると思うけれども、これまで話してきた助けなきゃいけない人をどう助けられるかとか、そういう場を作ったりして頑張っている図書館と安易に比較しないほしい。でも今の行政って本当に余裕がないので、図書館運営も本屋さんに任せればいいみたいなことになるんですけども。本屋さんを批判しているわけじゃないんですが、安易に任せるのはよろしくない。

都城の図書館はギャラリーを持っているので、ギャラリーでこのようにその場で柔軟にいろいろなことがやれます。コンビニ図書館ではこういうことはできないんですよ。本を読んでもらうにしても、ゆったりとした状態で読んでもらったりだとか。気分で今日は静かな場所にいたいっていう時はありますよね。そういう時に選択できるように「静かな部屋」



を作っています。BGM が小さな音で館内に流れてますが、静かな部屋には流れていません。どういう場所にしたらみなさんに来てもらえるかってことを考えています。

お弁当も持ってきていいよという「おべんとうコーナー」。青少年の居場所もあります。ここでオリジナルデザインのTシャツを作るとか、自分たちで表現すること、アイデンティティを表現する場です。

このすぐ脇に、7類芸術、服飾デザインや写真の撮り方だとかそういう本を並べています。本を読んで活動、ではなくて、活動してみて「どういうの作ればいいかわかりません」「あそこに本がいっぱいあるよ」「これ可愛いですね」みたいな感じで本というものに親しんでいく。対面朗読スタジオも、コロナ禍でインターネット放送スタジオにもなるようにしました。

10番目、最後ですね、《図書館と「持続可能性」》。図書館は本当にこれからどうなっていくんでしょうか。でもそもそも今回のタイトルで図書館の遺伝子を持った新しい施設種ってこと自体に違和感を感じますっていう人もいましたね。都城の図書館ももう図書館じゃない雰囲気もいっぱいあると思うんですが、都城市立図書館っていう名前にしています。だから別に新しくして全く名前を変えようっていう意味じゃなくて、いろんな種類のものが試せるんじゃないかという投げかけでした。今の図書館を変えちゃうなんて時期尚早ですっていう人もいましたね。しかし試すのであれば時期ってないんじゃないかなと思う。気持ちはわかります。従来の図書館の静かな雰囲気が好きですっていう人は多いから。そういう人の気持ちは大事にしたいので、静かな部屋を作ったり、やっぱり文学の本も充実させたりしているんです。

さあ、じゃあちょっと対話してみましようか。なんかないですか。

学生：今回の講義で、都城の図書館とかの例で説明してくださったんですけども、館内の閲覧席を分けたりすることは大きな土地がある地方でしかできないと思いました。私はずっと東京都葛飾区に住んでいるのですが、都内では土地が狭く、席数も限られる。場所が取れないのではということで赤を入れていたんです。利用者数を増やすためには図書館をリノベーションしていく必要があると思うのですが、東京など土地が少ない都市でリノベーションを行っていくにはどうしたらよいと考えているのかが気になりました。

森田：東京の場合だと本を読む環境は図書館以外にもいろいろなところにある気がするんですよね。だから利用者には借りてどこかで読んでもらうことも合わせて必要な環境を考えられるんじゃないかと思います。一方、地方のまちにはないんですよ、居られる場所が。場所を作らないともう子どもたち、若い人たちがどこにもいけない。家が学校にしか居られない。学校も行けないっていう子どもはもう居るところはないんですね。そういう意味でも地方には居場所としての図書館は大事。有料席はなぜ作ったかという、席を予約できるということで作ったんですね。無料だと予約した人が来ないことがある。空いているのにほかの人が使えないということになるので有料にして来られない時には席をちゃんとキャンセルしてもらうようにしました。都市では土地が限られているけれど、その地域にはどんな問題があって図書館は何に対処するかを考えていくことこそ大事だと思っています。

学生：お米をつくっていると伺ったんですが、どんなお米をつくっているのですか。

森田：コシヒカリですっていう答えでいいのかな。無農薬で、牛糞や鶏糞を発酵させた有機肥料を使っていますが、それもなるべくあげないようにして自然に近い形で作っています。大変なんですけれど、コツがわかってくると少しずつ楽になってきて、昔も多くの知恵があって実はそんなに大変な思いはしてなかったんじゃないかって思いはじめています。昔の暮らしって厳しかったとか大変だったとかっていうことばかりが伝わっているけれども。最近縄文時代はすごく幸せな時代だったという説に変わってきています。けれど、昔の知恵とかそういうものでもうどんどん消えていくんですよ。今だから残せる情報っていっぱいあって、それを聞き回って残していくということもある種図書館の役割なんじゃないかなと思っていますね。戦争体験などは結構あちこちでやられてますけれど、それだけじゃなくて昔は暮らしをどう楽しくしていたかみたいなことも聞いておくべきだと思います。

学生：図書館の中でさっき見せていただいたみたいに服を作ったり、いろいろな活動をするができると思うんですけど、地方だと公民館で陶芸体験などもできる場所がありますよね。図書館であれば体験をしながら本を見て調べることができると思うんですけど、公民館だったらそれができない。そうすると公民館の存在価値というか、そういうものが次第に下がってしまうと思うんですが、それに対して公民館側は独自の利便性みたいなものを主張すべきだと思いますか。

森田：公民館がある場所に住んだことはありますか。

学生：埼玉のちょっと田舎の方に住んでいて。ショッピングセンターのなかとかにそういう何かシニアの方々や子どもたちが体験できる場所とかも多くあって、それでいて図書館とかで地域の祭りの紹介とかそういう体験とかもしているのでちょっと被っちゃうところがあるんですよ、役割が。今回の講義では完全に図書館に焦点が当たってしまっているんですけど、それとは離れて、そのような活動をしている場所の良さっていうのをちょっと知りたいなと思いました。

森田：公民館長は民間の人なんですね。各地区の自治会の人が公民館長です。なので「私たち住民」がやりたいことをやっていく場所ですね、違いとしては。それと行政がやらないといけないことが同じになってきた感じ。図書館はもともと公民館図書室だった。だとすると、図書館を再び公民館図書室に戻すっていう可能性を考えたほうがい

と思います。その方が住民のニーズをそのまま取り込むことができる。ただ一旦そうやって組織を作ったものを元に戻すって難しいですよ。これはもういろいろな人から反対意見がでると思うんですけども、公民館図書室があっちこっちにあった方がそれはそれでいいと思います。さっきの遠い近い問題もなくなるから。「まちライブラリー」っていう仕組み、知っていますかね。まちのお店の一角やマンションの空き室を使って、みんなで本を持ち寄って貸し借りをする。現にそういうことが全国各地で起こっているんですよ。それはやっぱり身近に本があって居られる場所がほしいってことの現れだと思うんです。それが図書館となっちゃうと近くに住んでいない小学生は自分たちだけではいけないんですよ。学校区から出ちゃいけないとかがあって。とても正しい指摘だと思います。

中山美由紀：ティーンズがいろいろな活動をする場をセッティングした後、彼ら自身からの企画って持ち込まれるようになったのでしょうか。そうだとすればどんな活動しているのかも知りたいと思いました。

森田：残念ながら高校生は大学に進学すると市外に出ってしまうので、図書館にいなくなっちゃうんですよ。ティーンズが次々に変わってしまうので持ち込まれないんです。ただ、街なかにいる若手がこの動きを見ていて、自分たちのマークをTシャツに刷ってそれを着てまちを歩くと特典があるみたいなことをやりたいとか、活性化し始めています。単にデザインする楽しさだけでなく、それで何ができるか、地域をどう変えていくかみたいなところが出てきたのが思わぬ効果でした。

中山：他の年齢層に影響が見られたってことですね。

森田：図書館っていうと高齢者が多いイメージです、という意見がいっぱいありましたけども、確かにね。そうなんですよね。だけど都城は年齢層が低いんですよ。若い人ばかりで。

中村百合子：本日はありがとうございました。最後に少し私から。自力で生活できない人を政府が助けてあげるべきという調査結果のグラフについて。私が皆さんたちぐらいの頃、歳をとった人たちが私に、憂国、国を憂いて日本はこのままだと.....みたいなことをいうのを見て、ああ歳とるとこうなるんだなって笑っていたのですよ。ところが最近、私が憂国しているの。一番の憂国の種がこれなのですよね。自己責任論がものすごく。それで私はこの図書館概論の第1回からおせっかいな人しか司書にはなれないっていう話をしている。人を助ける気がない人はここにいてはいけないと言っているのですよ。だからここにいるメンバーは「助けてあげる必要はない」のグラフには入っていない人がきつといるはず。アメリカと日本の図書館の比較というのが私の研究テーマで、20、30年ぐらいやっているわけね。私が20、30年前に留学した時、ものすごい自己責任社会だと思ったのだけれど、今、日本はほとんど同じ感じになっているっていうのが私の肌感覚ですね。だけど、私はアメリカには図書館があり、宗教があって宗教団体のところに行くとなんかいろいろな助けがあるのよ、アメリカって。政府は助けてくれないかもしれないけれど、宗教団体と図書館は必ず助けてくれる。そのふたつがこの国にないから、私は憂国している。でも本当に森田さんと今まで接点がなかったのが信じられないぐらいすごく同じような思いをいろいろもっていらっしゃることが分かってとても嬉しかったです。紹介してくれたのが司書教諭課

程で「読書と豊かな人間性」を教えてください。中山美由紀先生です。ありがとうございます。本当に考えさせていただきました。みんなもたぶんそうだと思うのですが、図書館とは何かということを改めて考えさせていただいたのではないかと思います。ありがとうございました。